

## 第一章 アサシンの調教

わたしは、第三王女。そして……王宮の余りものと言われる存在。

王宮の中で輝いているのは、いつだって姉達だった。長女は才女と称えられ、次女はその美貌で各国の王侯貴族から縁談を引き寄せてる。父王や母の寵愛も、常に二人に注がれていて、私には微笑みすら滅多に向けられることはなかった。

けれど、それで萎れるような性格をしていたなら、とつくに心は潰れていた。私は誰にも弱みを見せなかった。強く、キツく、鋭い目で周囲を睨み返す。

「第三王女は、綺麗だが愛想がない」

「強くて、近寄りがたい」

陰でそう言われるのも、むしろ望むところだった。私の弱さを知られたら、すぐに食い物にされるのだから。

だけど……。

夜、部屋にひとりになった時だけは、押し込めていた寂しさが胸に広がる。華やかな宴で、私の名が話題に上ることはない。姉たちが賛美の言葉を浴びている横で、私は余りものとして笑いものにされている。……そんな現実が、どうしようもなく私を苛立たせた。

またその夜も、自室に籠っていた。書斎から持ってきた政務書類を机に広げ、黙々と目を通す。王女である私がチェックする必要などないが、せめて役立つ事をしているのだと自分に言い聞かせるため、毎晩その行為を繰り返していた。

カサ……。

紙をめくる音に混じって、ふと、風が揺れたような気配がした。

胸の奥で心臓が跳ねる。

「……誰？」

椅子を軋ませて振り返った瞬間、部屋の隅に黒い影が立っていた。長身で、無駄のない動き。冷徹な瞳が、私を射抜く。黒衣に包まれた姿は、月明かりすら拒むように闇へ溶けていた。

そして彼の名を、私は思わず口にしてしまった。

「……ペイン」

影のように動き、影のように消える暗殺者。父王の命を受け、幾多の敵国要人を葬ってきたという男。アサシンの名を冠するにふさわしい、恐ろしい存在。本来ならば、第三王女である私の部屋に現れることなどあり得ない。けれど彼は、王の命がない時に限って、なぜか必ず私の前に姿を見せるのだ。

「また、そんな仕事をしているのか？」

「悪い？」

強がって問いかけると、ペインは無表情のまま答えた。

「姫には関係のないことだろう？」

「うるさいわね。私の勝手じゃないの！」

言い返した声は、わずかに震えていた。彼はゆっくりと一歩、また一歩と近づいてくる。歩みは音もなく、まるで空気そのものが彼を運んでいるようだ。

手には、見慣れない小さな鉄の輪と革紐。

「な……なによ、それは」

私から、かすれた声が漏れると、彼の唇が月明かりに照らされ歪んだ。

「王女。……今日も、遊ばせてもらう」

甘やかすように低く響くペインの声。命令とも囁きともつかないその響きに、全身がざわめき立つ。気高く強く見せた私の意志が、彼の視線に触れた瞬間、ぐらりと揺らいでしまった。

……そう、彼との関係が、いつから始まったのかも思い出せない。

王城では、常に気丈に振舞っていたはずの私だった。けど夜の帳が降りれば、ペインは影のように現れる。書斎、寝室、廊下の暗がり。その場所は関係なく、彼は必ず私のもとに来了。私は少し身構えながら、強気でペインに言う。

「あなた、自分の立場が分かっているの？　こんなところに来て」

強く睨み返したつもりだった。だが彼は、氷のような瞳で微動だにせず言う。

「王女……今夜はもっと楽しませるぞ」

冷徹な彼の声に、懇願のような音が混ざり、私の胸の奥で熱が広がっていく。強く見せている自分を、すべて見透かされたような感覚。たとえば気丈な態度を

保つても、彼の手が触れれば、あつという間に蕩けてしまう。

ペインはゆっくりと近づいて私の髪を撫で、肩に手を置く。その手の冷たさと硬さに、私の身体が硬直する。するりと胸元に、彼の手が落ちた。

ぴくん。その指が、服の上から乳首のあたりに触れる。

「ん……」

「ここ……敏感だからな」

言葉の一つ一つが、胸に突き刺さる。私の体は正直で、頬を赤くし息を乱す。

「やめ……なさい」



「いいから座れ」

彼は私をソファ―に座らせ、手元の道具を取り出す。小さな革紐と金属の輪。震える心と身体を、彼はじっと見つめ楽しむように微笑む。

「……何を……しているのか分っているの？」

「ん？ どうするつもりだ？ 叫んで助けを呼ぶつもりか？」

できるはずもない。余りものとされて、誰の寵愛も受けていない第三王女。助けを呼んだところで、男を引き入れたなどと言われるのがオチだ。ペインはそれを分かって、私にそんな事を言っているのだ。

その指先が、私の乳房を掴んで揉み始める。

「あ……」

カチャン！

「なに？」

乳房を揉みながら、ペインは私の手首と足首を、持っていた道具で繋ぐ。

そのことで、私の足首は手首に引っ張られて持ち上がった。するとペインは、その逆の手首と足首もカチャンとはめた。

「は、外しなさい、こんな格好をさせるなんて！」

「だめだ」

そして彼は唐突に、私の体をひょいっと持ちあげて、窓際まで持つて行く。シャツとカーテンを開けて、私の顔を外に向けた。月光が縛られた私を照らし、私の視界には、城の庭園が広がっている。よく手入れされた、美しい庭園。

「やめて、外から見えるわ！」

「こんな夜更けに回ってくるのは、せいぜい衛兵くらいのもんだ」

「ちよつと、やめてよ！」

「暴れたらいいさ、思う存分」

「……」

暴れる事も許されない。私は手足を繋がれて、ペインに抱かれ外を見ていた。

するり……。。

ペインの手が、私のスカートの裾から潜り込んで来る。それが股の一番奥の、私の秘所に下着の上から触れた瞬間、熱が全身に広がる。

「あっ！」

彼は口元に指を当てて、低く囁く。

「叫ぶなよ、分ってるな？」

私は彼の支配に逆らえず、身体を震わせる。。

ペインは冷徹な表情を崩さず、ただ私を見つめ、私の秘所をまさぐっている。その眼差しの中には、ただの執着があるだけだった。第三王女という肩書きも、強がる私も、すべて彼の罠に落ちている。

「……ああつ、……いや、だめっ……」

それでも彼の指が容赦なく動くと、股間にじわりと染み出て来るものがある。私の恥部が、ぐにぐにと弄ばれて、意に反して蜜を滲みださせているのだ。

「感じているな……お前はかわいい……」

その一言に、身動きが取れない。

「わたしは！ 第三王女なのよ！」

だがそれを無視して、ぐにぐにと秘部を弄ばれ続ける。指が秘所をなぞるたび、腰が勝手に震えた。彼の冷たい指先と、下着越しの熱が交じり合い、頭の芯までしびれるように広がっていく。

「ひっ……あ、や……やめ……やめなさい！」

言葉では拒むのに声はかすれて、強がって睨もうとしても瞳が潤んで思うようにいかない。動けば、金属の輪が小さく鳴る。縛られた手首と足首が引かれ、身体がぎこちなく持ち上がる。両膝がわずかに開かされ、無理に閉じようとなれば革紐が肌に食い込む。

「王女。……無様だな」

「っ……！ やめて……」

低い囁き。耳元にかかる息が熱く、心臓が破裂しそうに跳ねる。

「こんなに濡らして。強い顔をして、結局は……触れられただけでこうだ」

するり、と指先が下着の隙間から潜り込み、じかに濡れた部分をなぞる。

くちゅう♡

「あっ……やっ、だめっ……!!」

背筋が弓なりに反り、全身を駆ける甘い電流。窓の外には月明かりの庭園。誰かが見上げればきっと、無様に縛られのけぞる私の姿が見えてしまうだろう。そう思うだけで羞恥に震え、意に反して熱が下腹部に集まってくる。



「声を殺せるか？」

「んくっ」

彼の指がぐちゅりと音を立てた瞬間、喉から押し殺した声が漏れた。必死に噛み殺しても、身体が勝手に震え、秘所から溢れる水音が裏切る。窓ガラスには、私の白い息が模様を作っていた。

くちゅ♡　ぴちやあ♡

止めようとしても、勝手に音を立ててしまう私の体。

「かわいい音だな。もつと聞かせろ」

「い……いやっ……聞かせ、ないっ……」

拒絶の言葉は、快楽の波に吞まれて弱々しくなる。第三王女としての矜持、プライドを守ろうとする心と、身体の反応が裏腹で、せめぎ合っていた。

ペインは唇を私の耳元に寄せ、冷たく甘い声で囁く。

「お前は、強くなんかない」

「っ……やめて……そんなこと……」

「なら証明してみせろ。この快楽に溺れず、最後まで耐え切れるか？」

次の瞬間、彼の指が一気に奥深くへ侵入した。  
ずぶずぶずぶ。

「ひゃっ……！ あ、ああああっ！」

悲鳴が、月明かりの下に響いてしまった。それが恐ろしくて、恥ずかしくて、  
なのに心の奥で、どうしようもないほど熱いものがこみ上げてきた。

恥ずかしい穴の奥に突き込まれた指に、全身が跳ね上がった。腰をよじつて  
も、革紐に縛られた手足が思うように動かない。

「くっ……あ、やめ、やめっ……、やめなさい！」

ぐちゅ♡グチュグチュ♡ぬちゃあ♡

涙声で懇願するのに、指は容赦なく蠢いて奥を探り柔らかな壁を擦りあげる。

「ふ……中まで、熱いな。こんなに締めつけて……説得力がないぞ」

耳元のペインの声が震えを誘う。羞恥に頬が焼ける。ガラス越しに睨み返しても、快楽に震える身体がすべてを裏切っていた。

「っ……わ、わたしは……第三王女よ……っ」

「そうだ。城の余りもの……だが、俺のおもちやでもある」

「ちがうつ！ ああ！」

プライドを踏みにじる言葉に、悔しさで胸が詰まる。けれど次の瞬間、彼の指がナカの敏感な一点をぐりぐりと擦り上げた。

「ああああっ！」

堪えきれず、甲高い悲鳴が月夜に散った。息を吞んで口を塞ごうとするが、痺れる熱が喉を震わせる。

「声を殺せと言ったはずだが……もう無理か？」

「ち、ちがつ……あ、あ……やつ、だめえ……とめて」

必死に首を振る。けれど、彼は無表情のまま指の動きを速めた。奥と入口を交互に責め立て、濡れた音がいやらしく響く。

ぐちゅ♡ ぐちゅぐちゅ♡ ずふう♡♡

「うあ♡ んん♡ うはあ♡♡」

腰が勝手に揺れる。繋がれた両足が小刻みに震えて、彼の指の動きを迎え入れてしまう。

「やめ、だめっ……で、でもっ……」

「なんだ？……イキたいのか？」

低く冷徹な問いかけに、胸が詰まる。否定しようと唇を開いても、舌が震えて声にならない。

「素直に言え。イカせてくれと」

「……っ……い、いや……わたしは……そんなんじや」

言葉を遮るように、敏感な一点を強く掻き始めた。

「あああつ！　だ、だめえつ！　掻き出さないで！　体が動いちやう！」